

「令和元年度ふくしま『学びのスタンダード』推進事業」推進地域の取組

パイロット校名	白河市立白河第二中学校、白河市立みさか小学校
推進協力校名	白河市立白河第二小学校

「授業スタンダード」を基盤とした 授業改善と指導力の向上を目指して

白河市では、白河市立白河第二中学校（パイロット校Ⅰ）、白河市立みさか小学校（パイロット校Ⅱ）、白河市立白河第二小学校（推進協力校）の3校が、学びのスタンダード推進事業に取り組んだ。

それぞれが市の中心校として、現職教育や研究公開を通して授業改善と指導力向上に取り組み、その成果を発表している。今年度は「学びのスタンダード」推進事業の3年目、最終年度となり、いずれの学校においても、「授業スタンダード」を研究のベースに置き、白河第二中学校では「生徒の学習意欲に着目した学習過程の充実」を、みさか小学校では「目指す授業像具現化のための8つの手立て」を、白河第二小学校では「4つの指導技術」を通して授業改善に取り組んだ。

1 推進地域における「授業スタンダード」の活用について

(1) **パイロット校Ⅰ** 「授業スタンダード」を活用した校内研究と授業研究について

学習意欲に着目した学習過程の充実に向けて各教科で手立てを考え、実践を積み重ねることで生徒の学びに向かう力を育てた。有効な手立てを考える際には「授業スタンダード」をよりどころとした。

学びに向かう力を育成するための授業のあり方の検証や実践研究の場として、授業研究の機会を設定した。教科単位で授業参観と事後研究会を行い、事後研究会では、「授業スタンダード」を活用し、模造紙を使用したグループワークを取り入れ、手立ての有効性を検証した。



【グループワークの様子】

(2) **パイロット校Ⅱ** 「授業スタンダード」を活用した校内研修の活性化と指導技術の向上について

目指す授業像具現化のための8つの手立てを授業スタンダードより設定した。さらに、児童の実態により8つの手立ての中の4つに重点を置いた。

また、授業前、授業後のポイントも付け加え「授業スタンダードみさかスタイル6つのポイント」とし、授業改善に取り組んだ。（「授業スタンダード」の自校化）

2 パイロット校の取組内容

(1) 中学校数学科における「タテ持ち」の取組について

数学科のタテ持ちの取組については、以下のとおりである。

	1組	2組	3組	4組	5組	6組
1年生	教員A	教員B	教員B	教員C	教員D	*
2年生	教員D	教員C	教員A	教員B	教員C	*
3年生	教員C	教員C	教員D	教員B	教員D	教員A

- ① 上の表のように4名の教員で全ての学年を担当した。
- ② 時間割に教科部会を位置付け、授業づくり・進捗等について話し合った。

【成果】

- 話し合いの機会が増え、進捗、今後の予定、テスト作成、評価などについて共通理解を図ることができた。
- 系統性を意識できるようになり、授業改善に役立った。
- 指導法の話がしやすくなり、コミュニケーションが増えた。



【数学の授業の様子】

【課題】

- 経験が少ない教員にとって、教材研究が大変であった。
- 生徒指導面で、所属学年の生徒との関わりが少なくなってしまった。
- 担当クラス数の関係で、同じ内容の指導を同一年度にもう一度できない。

【今後の取組】

- 「ベテラン教員からの指導技術の伝承」が確実になされるよう、教科部会で話されていることが教科部会でなくても話されるような教員文化の醸成が必要である。

(2) 小学校の教科担任制の取組

3年生以上で一部教科担任制を取り入れた。出分科と交換授業を組み合わせた教科担任制を実施した。教科は、担任の専門教科などを考慮しながら話し合って決定した。

- ① 3年生での実践 A:1組担任 B:2組担任 C:専科 D:英語専科 E:研修

教科 時数	国語	書写	社会	算数	理科	音楽	図工	体育	外国語	道徳	総合	学活
215	30	70	175	90	60	60	105	35	35	70	35	
1組	A	A	A	A	A	A	C	AB	D	A	A	A
2組	B	B	B	B	B	E	B	AB	D	B	B	B

- ② 4年生での実践 A:1組担任 B:2組担任 C:理科専科 D:英語専科

教科 時数	国語	書写	社会	算数	理科	音楽	図工	体育	外国語	道徳	総合	学活
215	30	90	175	105	60	60	105	35	35	70	35	
1組	A	A	B	B	C	A	A	AB	D	A	A	A
2組	A	B	B	B	C	A	B	AB	D	B	B	B

- ③ 5年生での実践 A:1組担任 B:2組担任 C:理科専科 D:英語専科 E:教務
※加配が入り少人数指導

教科 時数	国語	書写	社会	算数	理科	音楽	図工	家庭	体育	外国語	道徳	総合	学活
175	30	100	175	105	50	50	60	90	70	35	70	35	
1組	A	E	A	A※	C	A※	B※	B※	AB	D	A	A	A
2組	B	E	A	B※	C	B※	B※	B※	AB	D	B	B	B

- ④ 6年生での実践 A:1組担任 B:2組担任 C:理科専科 D:英語専科 E:教務

教科 時数	国語	書写	社会	算数	理科	音楽	図工	家庭	体育	外国語	道徳	総合	学活
145	30	105	175	105	50	50	55	90	70	35	70	35	
1組	A	E	A	B	C	B	A	A	AB	D	A	A	A
2組	A	E	B	B	C	B	A	B	AB	D	B	B	B

【成果】

- 専門性を生かすことができ、学習内容が充実することで、児童の学習意欲が高まる。
- 担当する教科数が減り、教材研究が深まり、準備の負担も減る。
- 同じ授業を複数回行うことにより、授業改善ができ、授業力も高まる。
- 学級間の指導の差が出ない。
- 学年全体の児童の様子が理解でき、複数の教員の目で見ることが生徒指導に有効である。

【課題】

- 時間割編成に時間がかかる。
- 急な授業変更ができず、交換授業は、教科の時数が合わない場合は難しい。
- 専科の場合、教科指導について話し合う教員がいない。
- 学校全体として学習指導に関する共通理解を図る必要がある。
- 「学級の指導」から「担当教科の指導」への教員の意識の改革が必要である。

(3) 推進教師の役割と具体的な取組

- ① 「学びのスタンダード」事業の推進
- ② 研究計画の作成と実施に向けての連絡調整
- ③ 校内研究の推進・研修だよりの発行
- ④ 校内研修会・互見授業の企画・運営
- ⑤ 教科担任としての授業の実施

3 推進協力校の取組内容

(1) 「学びのスタンダード」推進事業に伴う要請訪問の実施

白河第二小学校では、「学びのスタンダード」推進事業推進協力校の指定を受け、年間4回の要請訪問を行った。4教科（国語・社会・算数・理科）と特別支援教育の研究を行い、「学びのスタンダード」の趣旨を踏まえ、授業研究を通して、各教科特有の学びに基づいた実践について検証を行った。県南教育事務所の担当指導主事より、授

業内容や指導方法、各教科の本質に迫る教材の捉え方などについて多くの御指導をいただいた。

(2) 「授業スタンダード」と現職教育の関連

「授業スタンダード」と関連させながら、現職教育において「授業を変える12の視点」及び「4つの指導技術」について研究を進め、授業改善に取り組んできた。教師の指導力向上を図り、子どもたちの主体的な学習態度と学び方を育ててきた。

一昨年度より、全ての教師が全ての学級で同じ指導ができることを目指して、「4つの指導技術」に重点を置き、日々の授業改善に取り組んできた。

「4つの指導技術」

- ① 発問の完全成立・発問への完全反応
(発問に関する指導技術)
- ② 教師の軌跡(机間指導・話し合いのコーディネートに関する指導技術)
- ③ 発言回し(話し合いのコーディネートに関する指導技術)
- ④ 構造的な板書(板書の指導技術)



【発問の完全成立・発問への完全反応】



【教師の軌跡】

「4つの指導技術」が共通実践事項として徹底した取組になるよう、第1回研究推進全体会で共通理解を図った。また、「4つの指導技術」を参観の視点としたパイオニア全体授業と事後研究会を行った。さらには、研修日より「一座建立」を定期的に発行し、計25回行われた各研究授業の授業評による実践内容の検証を行ってきた。

(3) パイロット校と連携した「授業スタンダード」に基づく授業公開について

みさか小・白河第二中学校の授業公開に、研修主任と4教科の教科主任が参加した。授業参観後の事後研究会において、他校の先生方との交流の場を積極的に活用し、「授業スタンダード」を視点に授業づくりと子どもの学びについて意見交流する機会を持つことができた。

現職教育では、「指定授業」を年4回(国語・社会・算数・理科)位置付け、研修の機会とした。パイロット校2校以外にも、県南地区の小・中学校より参観者があり、授業に対する感想をいただくことができ、よい機会となった。

4 3年間の取組から見えた成果と課題

(1) 成果

- 推進地域(白河第二中学校区)で、「授業の約束」を作成し、発達段階に応じた授業のきまりを小・中学校間で共通理解して、授業を進めることができた。
- 「授業スタンダード」を活用・自校化し、授業研究を行うことで、授業の基礎・基本を再確認し授業改善に努めることができた。
- 教員が互いにより良い授業を目指し、互見授業や授業研究会に主体的に参加するなど、学び合う意識が向上し、授業の質的改善につながった。
- 生徒の学習する姿勢に変容が見られ、粘り強く問題に向き合うようになった。
- 教科担任制により児童の学習意欲が高まり、内容理解も深まった。また、教師にゆとりが生まれ、より細かな教材研究ができるようになり、専門性を高めることができた。



【教科担任による理科の授業の様子】

(2) 課題

- 「授業スタンダード」を活用した指導技術の向上
- 「授業スタンダード」と校内研究の更なる融合
- 「学習の約束」や授業スタイルの共通理解と徹底
- 教員同士の学び合いの日常化
- タテ持ちの充実と教科担任制のさらなる実践
- 自己マネジメント力を高める家庭学習



研修だより

みさか小学校 研修部

NO 5

令和元年7月12日(金)

QU の研修会に参加して

先週、白三小の QU 研修会に参加してきました。昨日、本校でも結果を先生方にお渡ししましたが、学級の子どもたちの様子はいかがだったでしょうか。今回、みさか小学校の要支援児童は〇名でした。その他、学級不満足群にいる児童など、気になる児童が見えてきたことと思います。三小の研修会の資料を配付します。自分の学級のタイプや今後の担任としての留意点等参考にしてください。担任一人で悩まず、チームで対応していくことが大切だと講師の先生もおっしゃっていました。心配な児童には、いろいろな先生方の様々なアプローチで良い方向にむかっていくようにしていきたいですね。学級のよりよい人間関係の構築のためのグループエンカウンターの一取り組みの資料もあります。詳しく知りたい時はどうぞ声をかけてください。

～ 1 学期の研究授業の振り返り NO 2 ～

第 2 回校内授業研究会 6 年 2 組 高島 朋子 先生

算数科：分数のわり算

- まさに「ザ・スタンダード」の授業。カードをよく活用して、先生も子どもたちも本時の授業の見通しをしっかりと持っていた。
- 意図的指名、途中のストップや問い返しなどのコーディネートが有効だった。
- 算数日記の書く視点を示したり、自己評価表を作成して毎時間ノートに貼り評価させたり、振り返りの時間が充実していた。
- 習熟で、一発検索くんを活用し過去の全国学力テストの問題に取り組んだこともよかった。

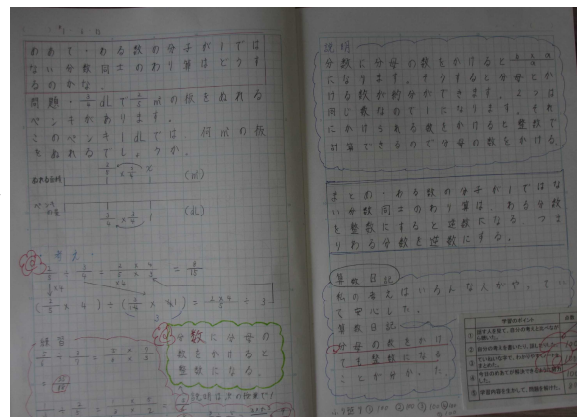
高島先生は算数の教科担任で、日頃から学習過程カードをしっかりと活用し、学習のスタイルが確立されています。子どもたちもその学習スタイルを身につけ、自然にいつもの流れで授業が進んでいきました。難しいと思われた「分数のわり算」の授業でしたが見事にやりとげました。「これぞスタンダード！他の学校にも是非紹介したい。」とご指導の緑川先生も大変褒めていらっしゃいました。前日に板書を実際に一度書き、ブロックの恵美子先生と一緒に確認し、最後まで準備を丁寧にされていました。全ての子どもをやる気にさせる高島マジック。どの子も「できる！」という自信に溢れていました。

また、たくさんのお話を学ばせていただきました。素晴らしい授業ありがとうございました！

自己評価表

	学習のポイント	点数
①	話す人を見て、自分の考えと比べながら聴いた。	100
②	自分の考えを書いたり、話したりした。	100
③	ていねいな字で、わかりやすくノートをまとめた。	100
④	今日のめあてが解決できるように努力した。	100
⑤	学習内容を生かして、問題を解けた。	100

ノート





研修だより

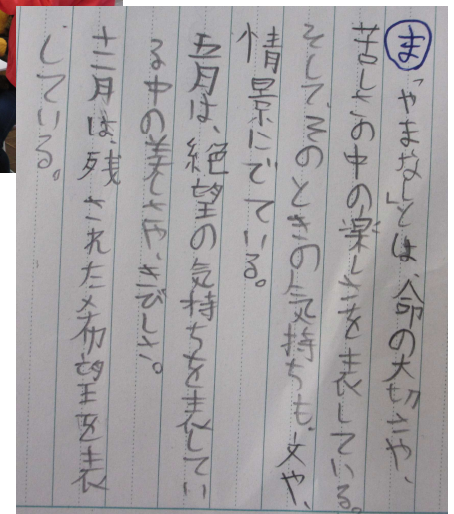
みさか小学校 研修部

NO 12

令和元年11月20日(水)

6年生国語科一授業お疲れ様でした

前日は学校訪問、当日は小教研役員会と超多忙な中、その合間を縫っての授業。本当にお疲れ様でした。宮沢賢治の「やまなし」の授業。「やまなし」は何を意味しているのか、本文と別教材の「イーハトーヴの夢」の賢治の生涯の中から根拠を見つけ、自分たちなりの理由付けをしながら考えていきました。1組、2組それぞれの個性が石井先生のコーディネートにより、よく出ていました。始めに行った2組での授業を活かして1組では導入での前時までのノートの振り返りの時間を取るなどの教科担任ならではの工夫も見られました。ビデオに撮ってありますのでどうぞご覧ください。



お知らせ

- 明日は、一嵩先生の3-1での特別授業です。裏に授業の流れを印刷してあります。どうぞ参観してみてください。(3校時)
- 漢字検定の事務局から、漢字のびのびプリントをいただきました。1枚だけですが、各学級でご活用ください。
- 漢字検定を受ける児童向けの学習プリント(7回分)の冊子があります。研修掲示版前の棚においてありますので、必要な時にはコピーしてお使いください。

一座建立

2019. 4. 23 (火) No. 581

パイオニア授業（4つの指導技術を中心として）

4月22日（月）に吉田先生にパイオニア授業を実践していただきました。持ち上がりとは言え、新学期が始まって1ヶ月も経たないこの時期、6年生として学校を動かす活動を毎日行っている忙しい中、授業を提供していただきまして、本当にありがとうございました。

子どもたちが主体的に学習する授業を目指すためには、4つの指導技術を中心とした学習集団づくりがとても大切になります。ぜひ、今回のパイオニア授業を参考にいただき、授業の中で取り組んでいきましょう。

○「発問の完全成立」と「発問への完全反応」について

完全反応を引き出すためには、発問した後に、『間』を取ることが重要になってきます。発問した後、すぐに手を挙げる子と時間がかかる子がいます。どうして時間がかかる子がいるのか、理由を考えてみると・・・大人でも難しい問題を出されればすぐに解答できず、少し考えてから反応することはよくあります。子どもたちはまさにその精神状態になっているのだらうと思います。分からない、思いつかない、不安である、自信がないなど様々な状況です。だからこそ、『間』が必要になってきます。今回の吉田先生の授業では、授業のまとめのときに完全反応をねらった場面がありました。しっかりと間を取ることで、少しずつ手が挙がっていきました。それでも、一人、手を挙げることができませんでしたが、吉田先生は手を挙げられない子の側に行き、声をかけました。また、授業後には、その子の算数日記を振り返り、その子の気持ちに寄り添う姿がありました。そういった毎日の積み重ねで、子どもたちが安心して手を挙げられる授業ができあがっていくのだらうと思います。集団を指導する中で個を育てていくとは、ご指導いただいたことでしたが、まさにその瞬間だったのだと思います。

また、発問を成立させる際に、大切なこととして、『構え』があるのご指導いただきました。「じゃあ、聞くよ。」「大切なことを言うよ。」など、子どもの気持ちを教師に集中させることで、子どもたちは、「先生がこれから大切なことを言うぞ。」と、聞く構えを作ることができます。発問は、子どもたち全員に発せられるもので、だからこそ、全員に答えて欲しいものです。声のトーン（高さ・強さ・大きさ）や速さを変えるなどといったことも含めて、『括弧「」で括る』発問を意識しましょう。

○「教師の軌跡」について

子どもたちが発言している際の吉田先生の動きに注目すると、しゃがんでいる場面が何回かありました。子どもはどうしても教師に向けて説明をしたがります。しかし、しゃがむことで、教師の姿は隠れ、子どもは子どもたちに向けて発言せざるを得なくなります。子どもたちが話しているときには、話し手も聞き手も意識を子どもたち同士に向けさせたいという意図がしゃがむことにあっただと思います。また、しゃがんでいるときには、子どもたちの様子をそっと観察することもできます。すると、子どもたちの表情から、しっかり聞いているのか、聞いてはいるけど聞いていることをきちんと理解しているのかどうかといったことも把握しやすくなります。

他にも、発表者から遠ざかる、発表者に近づくといったこともとても大切なことだのご指導いただきました。遠くから聞くことで、発表者の声が他の子たちに届いているのかが理解しやすく、自信のない子に近づいてそっと声をかけ、自信をつけさせることもできます。これらの積み重ねも、集団を指導する中で個を育てていくことにつながり、子どもたちが主体的に授業に取り組む姿につながっていくのだと思います。

○「発言回し」について

6年2組の子たちの発言の中には、子どもたちの名前がたくさん出てきました。「私も○○さんと同じで・・・」「この4って言うのは、○○さんが言っていた図の・・・」など友達の発言をよく聞き、自分の意見を話していました。事後研の中で、吉田先生は、子どもたちに「友達の発言の意図を汲む」ことを意識して指導してきたと話していました。発言の表面的な部分だけでなく、その意図を探ろうとすることで、数や式の意味を考える子どもたちが育っていったのだと思います。そして、その積み重ねが、子どもたち同士で発言をつなぐことにつながっていったのだろうとも思います。

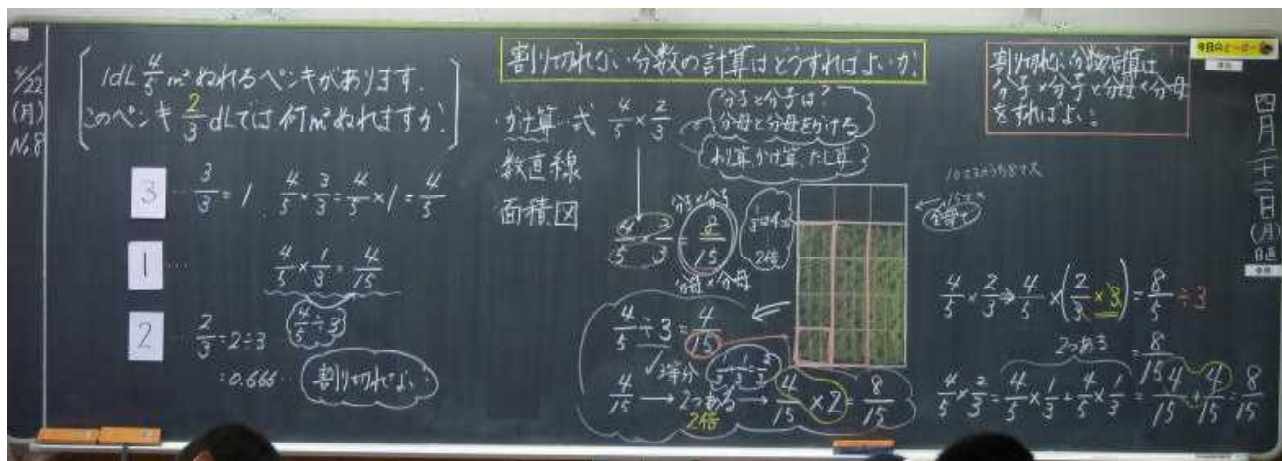
しかし、そのような姿を目指そうと思っても、なかなか上手くはいきません。そんなときに、子どもの発言をつなぐ方法として有効なのが、発言回しです。例えば、

- ・「～さんが言いたいこと、分かるって人？」
- ・「～さんが言ったこと、隣の人に言ってもらおうから。」
- ・「同じこと言える人？」
- ・「～君の考えを発表してもらおうから、どう思うか？」

など、つなぐ意識を高めさせる言葉かけや友達の考えを聞き、自分はどう思うかを意識させる言葉がけで、発表が学び合いに変わるきっかけとなっていくのです。

○構造的な板書について

今回の授業では、吉田先生が、「15ってどこに見える？」「本当にこれでいいのかな？」「○○さんの言ったこと分かる？」などそのときどきに応じた効果的な発問で、子どもたちの思考が方向付けられ、子どもたちの思考も整理整頓されていきました。事後研の中で、吉田先生からは、板書で子どもたちの意見を整理できていなかったと話していました。子どもたちの思考を整理整頓するのは、発問や指示はもちろんですが、板書も効果的です。今回の授業では、数と言葉、式と図などを線や吹き出しで結ぶことで子どもたちの思考はつながっていったとも思いましたが、予想した子どもたちの思考を結ぶ板書計画の大切さについても吉田先生は話をしていました。授業を行うときに、予想される子どもの考えを発問や指示でどうつなぐかは考えますが、板書の中でどうつなぐかということも大切だと思っています。



「4つの指導技術」の実践の積み重ね

「4つの指導技術」は、その一つ一つの技術が互いに関係し合っているものです。学習の土台となる学習集団づくりを日々、積み重ねることにより子どもたちはどんどんと育っていきます。つまり、「一人一人の子どもを大切に授業を行う」ということを、4つの指導技術を基に、毎日積み重ねて行っていくことが大切です。今回のパイオニア授業で、明確になっていった4つの指導技術のポイントを意識して、毎日の授業の中で、実践し続けてほしいと思います。それこそが、6年2組の子たちのように生き生きと授業に臨む姿につながっていくと思います。

吉田先生、大変お忙しい中、素晴らしい授業を提供いただき、本当にありがとうございました。